

『きりしたん受容史—教えと信仰と実践の諸相—』

(東馬場郁生著、教文館、2018年)

おやさと研究所教授

金子 昭 Akira Kaneko

本書は、長年にわたる著者のきりしたん研究の結晶であり、教文館「キリシタン研究」シリーズの第50輯として刊行された記念すべき著作である。『ぼうちずもの授けやう』と『おらしよの翻譯』表紙の口絵写真など、天理図書館の貴重な蔵書図版も掲載されている。

従来のきりしたん研究が伝道者や伝道組織（偉大な宣教師や修道会）に即したものが主だったのに対して、本書はきりしたん信仰を受容した側（一般の日本人信徒）に着目した“受け手のきりしたん史”の試みである。著者がひらがなで「きりしたん」と書く理由も、日本の宗教文化の中で人々がこの信仰を培ってきたあり方に寄り添うという意味がある。

こうした受容史の研究により、カトリック教会からすれば不純で逸脱した要素もまた、きりしたんの信仰表現として注目すべきものとなるのである。信徒たちは、十字架の印を切って水を浄め、この水を聖水として信仰治療に用いたり、災難除けのために十字架を描いて戸口に護符のように貼り付けたりしていた。このような受容の仕方は、象徴が持つ治療と保護の力への信徒たちの期待を意味するものであった。（現世利益や信仰治療への期待は、当時のヨーロッパの民衆キリスト教においても同様であった。この習慣が日本にも持ち込まれたのではないかと考える研究者もいる。）

今日、カトリックと言え、物分かりがよく寛容で、宗教間対話に熱心なイメージが強いが、そのような傾向は第2バチカン公会議以降のごく最近の事象に過ぎない。16世紀後半のきりしたん伝道にあつて、伝道の主たる担い手となったイエズス会は、当初その宗教的不寛容さにより、日本の宗教文化を否定し、仏像を焼き、寺社を破壊するという暴挙にも出ていたのだった。これに対して、宣教師ヴァリニャーノは、一神教的排他主義に拘泥せず、キリスト教を日本の実情に合わせて慎重に適応させようと努めた。ただし、彼の適用主義とて最終的には改宗が目的であり、自己を相対化して日本の宗教文化を評価したりするものでは決してなかった。

そのような適応主義は、キリスト教の内実を確保しつつ、目に見える表現は現実の習慣に順応させようとするもので、しばしば「実と殻」の譬えで表現される。しかし、受容する側にとっては、実と殻が別物だとは考えていない。例えば、数珠とロザリオが共存したり、受洗後に剃髪し出家したりということも起こる。だからと言って、そこに「仏教者か、キリスト教徒か」という近代的な二者択一主義を持ちこんでも、彼らの信仰を理解したことにはならないのである。

本書でとくに注目したい章は、第6章と第7章である。

第6章「日本の宗教文化における『きりしたんの教え』の意義」では、比較宗教思想的な視角として、キリスト教と浄土真宗の比較がなされている。この研究領域では従来、信仰のあり方や宗教的革新という側面に焦点を当てる形で、プロテスタントの思想家（ルターやキルケゴール）と、浄土真宗の宗祖の親鸞を対比させて、比較研究がなされてきた。これに対し、筆者はカトリック教会に基づくきりしたんと、本願寺教団中興の祖であ

る蓮如とを対比させて論じる。この対比には意表をつく新鮮な印象を感じる。けれども、歴史的に同じ時空を共有し、当時の日本人にとって現実の信仰の選択肢となっていたという事実からすれば、両者の比較研究は実を的を得たものだと言えるだろう。

きりしたんの教えは、救済の場として「後生」を強調した。こ

の死後救済の観念は、蓮如の『御文』にも見られるものだ。蓮如はまたその一方で、後生の救済を祈ることが今生の生活にも利益をもたらすとも説いた。「後生善所」とともに「現世安穩」が蓮如の教えのポイントなのである。そして、きりしたんの側でも、まさにこの同じ仏教用語を用いて、不干斎ハビアンが同様な現世・後世二重の救済観を説いた。主たる相違は救済者が阿弥陀仏かデウスかという点に集中する。しかし、救済観としては重なり合う要素を持っているがゆえに、受容する側には両者の教えがダブって見えたことであろう。

第7章「きりしたんの儀礼」では、日本の宗教文化の中におけるきりしたんの存在を理解するために、その教義の内容だけでなく、実践の様態としての儀礼にも目を向ける。これを秘跡と捉えてしまうと神学上の議論になってしまうが、儀礼という用語を用いることで、広く文化的なコンテクストの中での検討が可能になるのである。

通常は司祭や助祭のみが授けることができる洗礼であるが、当時は司祭が不在であっても信徒が「ぼうちずも」（洗礼）を授けることができた。それほどまでに、聖職者数に比して信者や信者になる者が多かったことが知られる。本章では、これ以外にも、「べにてんしや」（ゆるしの秘跡）やきりしたん式の葬儀について、具体的事例を交えながら説明を加えている。在来の民俗儀礼に適応しつつ、いかに自らの儀礼を浸透させていったかというきりしたん側の工夫を活写していて、とても興味深い。

受容する側に焦点を当てた研究姿勢は、きりしたんの歴史学的研究だけではなく、今日の伝道宗教の社会学的研究においても十分援用が可能であろう。天理教においても、日本の宗教文化とは異なるコンテクストを持つ国や地域に布教伝道がなされる場合、教えや信仰や実践が現地の信者たちにどのように受容されてきたのか、さらにはどう受容されるのが望ましいのかといった、異文化伝道の今日的課題にもつながってくる。そのような意味でも、本書はとても重要な示唆を与えてくれるように思う。

